津奈木

発行所
津奈木公民館
芦北郡津奈木町
電話（代表311）番
編集　編集委員会
印刷所　旭印刷所
電話（水俣）③4101番

長寿村『日本一』となって

座談会

出席者（順不同）
林田義人（八十二）
吉野藤寿（八十四）
林田荒喜（八十五）
千々岩正勝（八十二）
高木慶太郎（八十二）
緒方洋（七十五）
司会　永松登弥

※司会者　日本一の長寿村、まことにお目出度うございます。日本一にもいろいろありますが、一二の傑出した個人によってなされたものでなく、たくさんの方々の永い生活の事実によって獲得された日本一とあってみれば、意義も一入深いわけ、そこで日本一とわかるまでのいきさつを林田会長さんからお話し下さい。

林田義…東北大学名誉教授近藤正二先生の著『日本長寿村紀行』の中に『日本一の長寿村は島根県隠岐の黒木村で、三八〇〇人に八〇才以上が、八〇人』とありましたので、赤崎を調べてみたら人口一二〇〇人に対して四〇人ですので、これでは赤崎が日本一ではないかと思つて、熊日を通じて、近藤先生に紹介してもらつたら、日本一に間違いなかろう…との通知をいただいたのです。

自然環境に恵まれた赤崎の夕暮れ

※司会者……日本一ときいて、どんな気がしましたか。

高木……あきれて、びっくりしました。

吉野……昭和四十二年に近藤先生がみえて、ここは老人が男女殆んど同数で、珍しい処である……と云われたことを思い出しました。

※司会者……長寿の原因は、どんなことと思いますか。

林田義…先ず食べものが、一つではないでしょうか。から芋、麦が殆んど常食で、それに魚介や海草類も多かつたし。

緒方……から芋は通じがよくて、健康にはいいそうですね。

千々岩…それによく働いたと云うことでないでしょうか。朝早くから畑に出て、夕方から夜にかけて海に出る、実によく働きました。

林田荒…赤崎のように段々畑が整理された処は一寸他では見られません。それに石を海岸から運びあげて、石垣を築くというわけで、開墾については一通りの苦労ではなかつたのです。

吉野……その上、山と海の景色もよく、日当りはよし、空気はよし、自然環境に恵まれていることも原因の一つでは、ないでしょうか。

※司会者……食生活が合理的で、勤労意慾が十分で、然も自然環境に恵まれ、健康長寿の条件がよく揃っていますが他におぞ付きはありませんか。

林田義…それは部落の人達が仲よくて、くよくよしない、つまり平和で人間関係がうまくいっているという点もあります。

緒方……赤崎の人は団結心が強いと思いますが、やはり人間関係がうまくいっているからでしょう。

千々岩…防波堤や小学校敷地の埋立などあんな大事業が出来たのもそんなことからと思つています。

※司会者……恵まれた環境や人情、それにあなた方の努力によって、日本一の座を占められた訳ですが、その体験に基づいてこれから生いたつ人達にどんなことを希望されますか。

林田荒…時代がこう変れば、昔のことを云つても、なかなか話が通じません。それでも健康の基本である『歩く』ということは努めて、つづけたらと思います。

高木……部落が仲良く平和であるようにと思つています。

林田……若い人達とも座談会をやって、大いに語り合ったらと思っています。

※司会者……その他何かお気付は、ありませんか。

林田義…日本一の五太夫どんがあり、日本一の長寿村となり、やがて日本一の小学校も出来あがります。日本一が三つも揃ったわけですが、やがてその四つ目が生まれるのではないかと期待しています。それと日本一になった記念に辻に『憩の地』をつくり、後々の人に贈ったらとの夢も、もっています。

※司会者……五番目の日本一には赤崎老友会が名乗りをあげるよう期待します。

皆さん有難うございました。

（文責・永松）

肥後狂句

堀　双岳選

（順不同）

そら見ろ、阿蘇はやっぱり雪だった。　**笹岳**

そら見ろ、言う鼻先イさでこけた。　**笹岳**

ひっちよこ飛び、待ちに待つたる男の子。　**笹岳**

そら見ろ、傘持たせてやらんけん。　**笹岳**

そら見ろ、なまけた証拠の通信簿。　**緑助**

ひっちよこ飛び、早う膳出せ燗つけろ。　**緑助**

そら見ろ、親の言うこつきかん罰。　**拙者**

そら見ろ、安物買いの銭うして。　**拙者**

ひっちよこ飛び、だむし使いにアこつのある。　**拙者**

ひっちよこ飛び、恋人からのよか辺事。　**拙者**

そら見ろ、又血圧の上りおる。　**緑助**

そら見ろ、かねて勉強しとかなん。　**緑助**

ひっちよこ飛び、産婆さん呼びイ走らした。　**緑助**

次題

大賛成。二度も三度も。

三月末日まで、公民館へ、四句以内。

竹田さん夫婦『生活経営モデル農家』として県大会で紹介される

去る一月三十日、熊本市民会館において開催された熊本県農業生活開発推進大会において、芦北地方代表として、上下門地区の、竹田昭二夫妻が出場、「**生活経営モデル農家**」として紹介される。

『夫婦ゲンカは、牛小屋デスタイ』

牛の顔の絵を首にぶら下げて芦北地方代表、津奈木町上下門、竹田昭二・和子御夫婦が登場（インタビュー前農林省矢口生活改善課長）「エライ仲が良かごたるですな—。」

数ヵ月経つと、讃美歌の声もなにかいいようのない一種の感動を覚え、これを口吟するようになった。いままでは笑を堪えるのに苦痛を感じるほど軽蔑していた祈禱の時にも、覚えず頭を垂れ、謹聴するようになった。しかしそれでもなお、聖書を研究してみようと思う気持も起らず、教師の説教も、熱心な学友の勧誘にも動かされることもなく、冷静で批判的な態度であった。

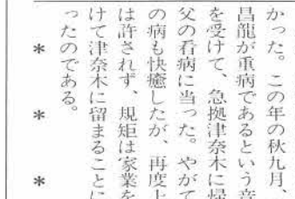
ある日曜日であった。学生たちはみんな教会堂に行ってしまって私独りが塾に残っていた。戸外は秋雨がしとしと降っていた。寂しさに堪えかねた私は、机上に置いてあった聖書を無意識に取上げ開いてみた。読んでいくうちに私は今日まで経験したことのない心魂にふるるものがあることを感じ、聖書を研究してみようという自発の心になったのである。その後益々深く研究していくうちに、「彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみづからのこらしめを受けて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれは癒やされたのだ」という聖句の真意を悟ることができたとき、私は感動で涙がしたたり落ちるのをとどめることができなかった。このとき自分の罪の一切をざんげして神に祈り、感謝して横浜住吉町の教会で教師ナックスから洗礼を受けたのである。明治十二年二月の第一日曜であった。

キリスト教入信の動機を、徳永規矩は、彼の遺稿「逆境の恩寵」に、大要このように誌している。規矩十九歳のときである。津奈木人にして最初のキリスト教徒となったのである。それから彼は、最も熱心なクリスチャンとして、傳道に専念していたのであるが、その頃、東京には彼の伯父江口高廉、幸準蔵、恩師元田水妥が在住していて、規矩がクリスチャンになったことを聞いて吃驚し、改宗するよう訓戒これつとめた経緯もあったが、規矩は所信を棄てなかった。この年の秋九月、父昌龍が重病であるという音信を受けて、急拠津奈木に帰り、父の看病に当った。やがて父の病も快癒したが、再度上京は許されず、規矩は家業を助けて津奈木に留まることになったのである。

＊　＊　＊

津奈木小学校百年祭によせて

岡本秋徳



モー君と仲良い竹田さん夫婦

地域への奉仕に努め、家族や地域での人間関係が円満である。⑦現在、将来も中核農家であること。

などが条件となっています。

私達も竹田さん御夫婦の様なすばらしい生活経営者になるよう努力したいものです。

県芦北農業改良普及所長　工木淳義

平国小百周年記念に記念文庫・ハモンドオルガン寄贈

目録贈呈

二月十七日午後一時から、平国公民館で、全児童、区民多数列席の下に、百周年記念実行委員長福村安則氏から、平国小学校長に対して、記念文庫・記念ハモンドオルガン贈呈の式が挙行された。

記念文庫は九二六冊八十八万円相当、ハモンドオルガンは電子オルガン中でも最新式のもので三六万円相当のもの。書架（七万円）は長崎書店寄贈、これで平国小教育の飛躍的向上が期待されている。

地蔵さんめぐり（五）

堀　一雄

交通安全守護の地蔵さん

交通安全地蔵菩薩

津奈木太郎三路線のうち、国道三号線の、峠バス停下る四十米は、極めて見通しの悪いくの字形のカーブである。

昭和四十年五月開通以来、事故多発地点となり、魔のカーブと言われている。

この道路は、半島のように突出した山を掘割って造られてある。

内側は防災工事が施されてあるが、外側は余り高くないので、切取ったままで直角に近い断面を現わしている。その断面の根元のわずかな空地に、一米足らずの段をしつらえて、五体の地蔵さんを並べて祀ってある。このカーブで、命を失った人の関係者が、故人の霊を慰め又是処を通過する多くの人々の安全を守って戴くため、建立されたものである。五体の地蔵さんは、大中小でそれぞれ形は異なるが、一米半もあるのもあるし、小さいのは三十糎位のもある。何れも念入りに彫刻された石像である。五体のうち、一番大きい地蔵さんは、本度市農協、県経済農協連、本渡市農協長会、の三者の名で昭和四十二年二月二十七日建立であるが、多分農協職員がこのカーブで事故に遭って殉職されたのだろう。中には行年二十二才と言う、青年の名を刻まれた地蔵さんもあり、この冷たいミカゲ石の地蔵さんを見ていると言い知れぬ哀愁にうたれる。是処では又、任命されたばかりの若い警察官が、交通取締りのパトロール中無惨にも殉職された。交通安全協会津奈木支部ではこの若い警察官の御霊を、交通安全地蔵菩薩として是処に祀った。

つみとがもなく消え去りし、いくたの御霊の冥福を祈りて建てし地蔵尊、津奈木太郎の頂をゆきかう人の安らぎと、幸福を守り給うらん、とはその碑文であるが皮肉にも、この地蔵尊に猛スピードで体当りしたドライバーもいた。勿論罰が当って大事故となり瀕死の重傷。

この峠に、六ッ七ッと地蔵さんが立ち並ぶことのなきを祈りたい。

子供のあそびを考えよう

婦人会の実験学習

現代は。

テレビッ子、無駄遣い（買食い）運動不足、間食が多くて、何をたべてもおいしくない。子供達の自由時間（遊び）の中には、一人遊びが多い。

といわれるが。

昔は。

お手玉、まりつき、石けり、はねつき等友達と戸外で一生懸命楽しく遊ぶことが多く、したがって何を食べてもおいしく、またそれが身についた。

そこで婦人会では、もう一度、昔の遊びについて考え、良いことだったら、いつまでも、残そうではないか、と考えてみた。

一、お手玉の唄。

いっちょ、にちょ、ちうろくじょう、まんごでとうお

（以下省略）

一、まりつきの唄。

いしの、じぞうさんが、わらいます、とうりゃんせ。

（以下省略）

こうした遊びの中に。

(一)、体を動かすので運動になる。

(二)、お金がかからず、楽しく遊べる。

(三)、負けたり、勝ったり、ゆずり合い、自分勝手な遊び（行動）は許されないのが聞かれた。

(四)、幼年時代（ふるさと）の楽しい想い出がつくれる。

(五)、家族ですれば、遊びの中に、親子の対話ができる。

(六)、等々婦人会の一致した意見

で、遊びの中に協調性、がまんなど知らず〳〵のうちに培うことができる。

友達ができる。

国内研修に参加して

鬼塚妙子

会員意識の高揚、という面で、会員のまさつをなくすために、各会員の意見を何でも言える様にしてあり、ご意見袋を配布、無記名で投函し調査の結果小さな意見でも良いものは取り上げて検討し、ふだんの人間関係の和が保たれる様にしてあります。

地域の連帯感を深めるために、年度の始めに農協と共催で五者会が開かれる（老人会・青年団・子供会・若妻会・婦人会）これは運営を推進するうえで、大変必要なことで学ぶべき点ではなかろうかと思いました。

次に団地の発表があり、団地とは、お隣との交際もうるさい処と聞いていた私の想像とは全く違い趣味のコースで学習し、ボウリング大会等を開いてストレス解消をしたり旅行をして親睦を計る等、人間関係が大変良いことを知りました。

山口市では、石油ショックの事後、消費生活連絡協議会が作られ、生活学校は中央で自主婦人学級は地域で行い、又小グループで学習し健康問題が大きく取り上げられて、生活に密着した学習を部制によって運営されており、みそ、漬物、豆腐づくりに重点が置かれ、毎日の食事に欠かせない漬物、みそをおいしく作るために、中央で学習し早速実行し持寄って試食会を開くなど、母の味が大事にされています。

山陽町では青少年の育成に力が注がれ、毛利家の家風である、団結の心（三本の槍の由来）を守り伝えるために、子供会と婦人会が一緒になって、年に一回毛利家の墓参が行なはれています。

又小中学校の給食に年間必要料のみそを婦人会が製造し寄贈されている等、各市町村の婦人会の献身的な熱心さに胸をうたれました。

山口県婦連では婦人会はなくてはならない組織であり地域の人に愛される婦人会でありたいと、一体となって、明治維新の故郷として風格のある運営が行なわれていました。

暖かい心のふれ合う会員意識の高揚という面では熊本県が優っている様にも感じました。13人のおてもやん、帰りの車中で「山口県はあ、た金が多かもん比較すつとしゃがわたしどんもたいぎゃあな頑張っとるけん負けんばいた。そるばってん今後がしっかりせにゃんたいなあ…」

私説

老人優等生（四）

日当　上村喜久太さん

鳥の鳴かない日はあっても喜久太さんが、山仕事に行かない日はない、と云はれるほど、上村さんの山行きは、近在での評判である。

三籾の山坂も、八十四才の上村さんには、かっこうの散歩道らしい。それでも家族の方が心配して、ほどほどにと云はれるそうだが本人は至って平気、弁当持参、八時に家を出て、夕方帰られるのが例らしく、先日など帰りがおそいので、若しやと思つて迎いに行かれると「心配すんな」と云つて坂道をおりてこられた、とか。

この頃の上村さんの山仕事は、数年前に植付けた杉檜の下払いで「来年になると草が少くなる、すくすく伸んでいる若木を見るとうれしくて、気持がいい」細い目を一だんと細めて大満悦である。山に生きる老人の愛情と気迫を、温顔の奥にしみじみと感ずる。

五町歩に余る山林の管理を、ほとんど独力でやっていられるようで、頑健と云うか、老いて益々盛んとは、このことではないかと思つた。

山を楽しみ、植林に生き甲斐を感じている上村さんも若い頃は漁業が本業で、十九才で上村家に養子に来て以来約六十年間は、不知火海を舞台に、ウタセ網に専念し海の男として存分に活躍、七十八才の時直腸の大手術を機に船を三男に譲つて、以来若い時から の楽しみであつた山仕事に打こむようになった…と、六十年間海で鍛えたのが、今日の健康の基になっていることはうなづける。

献金の筆頭、難破船の救助等にて特別表彰を受けているら しい。珍しく若い時から酒もたばこも一切口にせず、勤険ではないかと思った。

海にそして山に仕事一筋に生きて来た上村さんは、社会的にも又大きな役割を果している様で、消防団のポンプ係として二十五年勤務、健艦会的には率先して参加協力、正に二宮尊徳流の歩みのようである。

『老人会はどうですか』ときけば『老人会は楽しみである一回も欠席したことはない』と。

『八十年を振り返つて、どんな気持ですか』と問えば『やるしこやつた』と実に担々たるもので、精一ぱい働き抜いた上村さんは、老人優等生と云うよりも、むしろ、かくれた人生優等生とでも云うべきよく家を修めて財をなし、社

老連会長　永松　登弥

よい子の温床

熊大甲斐直義教授講演要項

去る二月十日、熊大教授甲斐直義先生を迎えて乳幼児教育学級が町公民館で開かれたが、町長、教育長の臨席と多数の学級生の参加で盛会であった。講演の内容の要旨だけを紹介する。

今日の人間社会に欠けているものは何か。社会的なモラル（人としてふみ行うべき道理）ルール（規則）の欠如はもとより、個人にしても心の糧（かて）とか、心の軸となる自我即ちバックボーン（確固たる信念）を持たない。人命軽視のいまわしい事件の続発の根源もそのあたりにあるのではないか。三つ子の魂百までといわれているが、乳幼児教育はそういう意味で非常に重要な意義をもっている。

※乳幼児と幼児前期（〇才～三才）

この時期においては、母と子の**肌のふれあい**が大切で、乳児の母親の肌や体温を通して心の安らぎを覚え、心の軸である自我の安定が芽生えるのである。また、乳児は自他の区別がつかないのであるから、乳児がはじめて自分を自覚するのは、母親の「いけません」という拒絶と、「こうなさい」という命令を媒介として自分を確立していくものである。「ありがとう」「ごめんなさい」とかの基本的な躾をするのもこの三才までの時期である。

※幼児期と幼児後期（四才～六才）

社会性を覚える重要な時期である。友だち関係の中で対話や遊びを通してわがままをしないとか、ゆずり合う気持とか、友だちに対する思いやりの心が芽生えてくる。

躾の面でもより高度なものになり、自分の身の回りのことができる自信を持たせるように方向づけることが大切である。

幼児語とか、よくない習性などはこの時期までになおしておかねばならぬ。

六才以後は小学校において基礎的な知識と豊かな人間性を身につける教育が始まるのである。家庭教育の始まりは生れてからではおそすぎるといわれている。つまり家庭における**具竹夫婦の協力調和**が家庭教育の基盤であることを心に深く刻みつけておくべきである。

津小長　芥川正則記

（カッコの中の註は編集者で加えました。）

生活教育の一こま

歩く走る会のあるき出し

気違い扱い

毎日きまって歩いたり、走ったりすると、世の人は「あの人はどぎゃんかしなっとらすとばい」と変な目で見られたりします。それで、走りたい（歩きたい）のだけれど、遠慮するのも人情でしょう。

希望申し込み

いま教育委員会では、歩く（走る）ことを世間の手前遠慮している人々を引き出してグループ作りされるのを手伝っています。回覧板があまり早く回り過ぎて、まだ申し込んでいない方は、すぐお申し出下さい。

実行中の人々

希望申し込み中でありますから正確な数はつかめていませんが、相当数は上ると思われます。二月十九日現在でわかっているところでは。

竹中グループ

日野忠延・長浜　学・山崎春実・鶴野申洋・成田　満・上田巡査・本山勝三。

古川グループ・その他

山下一八・古川秀喜・伊藤益夫・岡下親子四人・岡松岩雄夫妻・浜本ミツエ…その他

山口勝郎夫妻・浜本繁己外二人（女）財部栄喜・緒方孝行・鶴野満真・農添ナツエ・その他。

○第一回実施は

一、三月二十日　午前七時

一、場所　町民広場

備考　○歩く（走る）服装

○二時間以内で終る

一、同志の気勢をあげるため。

二、同志の増加をはかるため町内をデモる。

どうぞ、会員全部ご出席下さい。

竹中グループ

味噌汁を食う一家

躾の出発点は食事から

一家そろって味噌汁を食う家の児は、大体間違いない。逆に、お母さんの調理されたものに文句をつけて、箸をつけない児にはえてして問題児が多いようだ。

家庭こそ憩いの場所であるが、家族の一人一人が勝手気ままに振舞ったら、たのしかるべきところか、かえって住みにくくなる。

一人一人に好きな食べものがあるだろう。しかし一人一人の望むとおり食品を作るとすれば、お母さんの労力はいくらあっても足りない。とてもできることではない。また経済的にも許されないかもしれない。とすれば、お母さんの調理されたものを食べなければならない。つまり一人一人の自由は許されない。好きでなくても忍ばなければならない。お母さんのご苦労も察してあげねばならない。

先生が注意されたからといって箸で突き、先生から叱られたといって、刃物で刺そうとしたり、構ってもらえないといって、泣き狂う児は、家庭で「がまんする」などの教育ができていないのである。

このごろは「親が子を育てる」のでなく、「子が親をしつける」やに見受けられる。その証拠に、親は子のいうままに動いている。これでは教育の「本」がない。従って道徳もない。「本立ちて道生ず」という語がある。

もちっと親の権威をもって叱るところは叱り、しめるところはしめて、是非善悪、理非曲直のけじめをはっきりさすべきである。

しつけの基礎は家庭でつけなければどこにもない。親がしなければ誰も代ってはくれるものはいない。

一家そろって味噌汁を食うしつけは、あらゆる家庭のしつけの出発点である。この出発点で乱れたら、しつけの根本がくずれ、しつけは今後できなくなる。

しかし何といっても、よい子供を育てようとするなら、夫婦仲よいことである。